

老年期の心理社会的課題に関する研究の動向と展望

深瀬 裕子・岡本 祐子

(2009年10月6日受理)

A Review and Considerations of Studies on Psychosocial Tasks in the Elderly

Yuko Fukase and Yuko Okamoto

Abstract: The elderly stage of life is recognized as a period combining both loss and acquisition. Although the acquisition of qualities such as wisdom and insight are considered positive, a corresponding sense of loss cannot be evaded. The psychosocial task based on E. H. Erikson's epigenetic schema, however, does not resist the idea of a negative experience. Accordingly, it is useful for an understanding of this stage of life. I reviewed and considered the psychosocial tasks present in the elderly stage of life and focused on three specific research areas: the measuring method of psychosocial problems (investigative approach), the factor relation to psychosocial problems (related factor), and the feature of psychosocial problems (feature of the eighth stage). Two problems and considerations: (1) the necessity of creating a balance between positive and negative constructs, as Erikson emphasized, and (2) the necessity of introducing psychosocial tasks to the elderly by means of experimental study. Further studies are needed to assess how psychosocial tasks are invoked when providing clinical psychological support for elderly.

Key words: elderly, E. H. Erikson, psychosocial task, epigenetic schema, ego integrity vs. despair

キーワード：老年期, E. H. エリクソン, 心理社会的課題, 精神分析的個体発達分化の図式, 統合 対 絶望

問題と目的

日本は高齢社会を迎え、65歳以上の高齢者は全人口の22.1%を占めるようになった(内閣府, 2009)。老年期は生物学的喪失, 社会学的喪失と, これに伴う心理学的喪失を体験すると言われてきた(Birren, 1961)。一方で, 知能や創造性などは高齢になっても維持されやすいことも明らかとなり(Schaie, 1980; Romaniuk & Romaniuk, 1981)。さらに, 喪失を経験した高齢者が必ずしも不適応に至るわけではなく,むしろ人格的に発達し, 否定的な体験をしても家族や友人とのかわりによって心理的な回復が見られるという報告もされている(岡本・山本, 1985; 河合・佐々木, 2004)。このように, 老年期の肯定的な発達を明らかにする研究は, 老後を豊かに過ごすために非常に有意な示唆を与える。

しかしここで重要なことは, 否定的側面を取り除いて老年期を捉えることはできないという点である。身体機能の老化, 退職に伴う社会的役割や経済的基盤の揺らぎ, 変化する環境と自分への戸惑いは, 多くの高齢者にとって避けることができない体験である。

Erikson (1950 仁科訳 1977) は, 人間の生涯全体を扱い, 個体がゆっくりと成長していくという意味の人格漸成論に基づく精神分析的個体発達分化の図式(Epigenetic Schema 以下, 発達図式)を提唱した。各発達段階には, それぞれ顕在化する心理社会的課題があり, 課題への取り組みによって発達が説明される。具体的には, 基本的信頼感や自律性などの肯定的要素¹⁾と, 不信感や恥・疑惑などの否定的要素¹⁾のバランスが人間の発達にとって重要とされる。すなわち肯定的要素が否定的要素よりも優位となった状態が正常な発達であり, バランスが崩れ, 否定的要素に傾け

ば病理的な心的状態に、肯定的要素と否定的要素の拮抗が中間になっている状態は病的である。老年期は、統合 対 絶望という課題に取り組む時期である。Erikson, Erikson, & Kivnick (1986 朝長・朝長 訳 1990) によれば、絶望とは“もっと別のものであったならよかったのにと熱烈に望む過去の局面であり、絶え間ない苦痛の原因となる現在の局面であり、不確かかで恐ろしい未来の局面である。そして(中略)逃れることのできない死”(p.76)によって認められ、統合は、絶望を“排除するのではなく、人間としての全体感との力動的なバランスの中でそれらを認めようと努力する”(p.76)ことである。以上のように、Erikson の考え方は退行的方向や病理的な方向を含めて発達を説明した点で優れており(鏞, 1979)、避けられない喪失を体験する老年期において示唆に富んだ理論である。

この発達図式に関する研究は、心理社会的課題を客観的に測定しようとする尺度化の試み(Rasmussen, 1964)や、第Ⅴ段階に顕在化するアイデンティティに関する研究が隆盛している(鏞・山本・宮下, 1984)。老年期における心理社会的課題に関する研究は、70年代後半にアイデンティティとの関連で実証的研究として着手された(鏞・宮下・岡本, 1995)。しかしその後、漸増の傾向にあるものの、まとまった知見はごくわずかであり、特に第Ⅷ段階の心理社会的課題全体を捉えようとする研究はその途についたばかりである(鏞・岡本・宮下, 2002)。世界的に高齢化の傾向にある現在、国内外ともに老年期における心理社会的課題に関する研究が求められている(Snarey, Kohlberg, & Noam, 1983; 園田, 2005)。そこで本稿では、老年期の心理社会的課題に関する研究の動向を展望し、その課題について論考する。

文献収集の方法

国内の文献は、データベース CiNii (Citation Information by NII) を用いてキーワード“高齢者 OR 老年期”AND “心理社会的課題 OR 心理社会的発達 OR エリクソン”で検索した。国外の文献はデータベース Science Direct Online を使い、Title, Abstract, Keyword のいずれかに“elderly OR old”AND “developmental task OR psychosocial development OR Erikson”が含まれる“Journals”を検索した。さらに、検索された国内外の文献のうち、高齢者を対象とした研究を抽出した。また、論文の引用文献を手掛かりとして取り出したものもある。

以上の手続きにより、学会誌、研究紀要、書籍等において18件の国内文献と、15件の国外文献が抽出され

た。これらの文献を、心理社会的課題の測定方法(研究方法)、心理社会的課題に関連する要因、心理社会的課題そのものの特徴の領域に分け、研究内容を紹介するとともに論評を加えた。

研究法

心理社会的課題を測定する方法は、質問紙による測定、投映法による測定、事例の分析に分類された。

質問紙法による測定

心理社会的課題の達成度を測定する尺度の多くは青年期や成人期を対象に作成されていたため、これらの尺度を老年期まで拡大させる試みが行われた。しかし、近年、これらの尺度が高齢者を対象としたものでないという批判から、老年期を対象とした独自の尺度も散見されるようになった。

国内では EPSI (Erikson Psychosocial Stage Inventory: エリクソン心理社会的段階目録検査) が用いられることが多い(山田, 2000; 柳澤他, 2002)。EPSI は、Rosenthal, Gurney, & Moore (1981) が第 6 段階までの心理社会的段階における達成感覚について作成し、中西・佐方 (2001) が 8 つすべての発達段階を測定できるものに改訂したものである。同様に EPSI の対象年齢を拡大させ高齢者に適用できるように改訂した尺度として、MEPSI (the Modified Eriksonian Psychosocial Stage Inventory) が挙げられる (Darling-Fisher & Leidy, 1988)。また、野村 (2002) は、EPSI を高齢者に適用できるように、第 V, VI, VII, VIII 段階の質問項目を取り出して修正し、計 18 項目の質問紙を作成している。しかし本尺度は因子が不安定であり、心理社会的課題の一部しか測定できないという問題もある。

高齢者を対象とした独自の尺度も作成されている (Ochse & Plug, 1986; Domino & Affonoso, 1990; 岡本, 1995, 1998; 下仲・中里・高山・河合, 2000; 日下, 2004; 中村・宮前, 2008)。Domino & Affonoso (1990) は従来の尺度の多くが青年期を対象としていると指摘し、成人期を主な対象とした IPB 尺度 (Inventory of Psychosocial Balance: 心理社会的バランス尺度) を作成した。この尺度は 8 段階の発達課題の達成を測定するものであり、下仲他 (2000) が日本語に改訳している。本尺度は、標準化の手続きの一部で高齢者が対象とされている点で優れている。しかし成人期を主な対象として作成・改訂されているため、日本語版の信頼性の検討に高齢者が含まれておらず、使用には限界がある。

以上、質問紙調査による測定を行った研究を概観した。質問紙調査は発達の問題や自我の状態を全体的に

把握するのに有効である（中西・佐方, 2001）一方、高齢者には多くの質問項目から成る質問紙調査が困難である。この点において、高齢者を対象として作成された尺度は項目内容、項目数など、高齢者に適用するように作成されているため実用的である。しかし、8つすべての心理社会的課題を測定しようとするにもかかわらず8因子が抽出されないなど、さらに検討の必要がある。今後は、簡便に実施するための工夫と、老年期の特徴を丁寧に抽出することのできる精度の高い尺度の作成が求められる。

投映法による測定

SCT（Sentence Completion Test：文章完成法）を用いて高齢者の心理社会的課題を捉える試みがされている（岡本・山本, 1985；星野, 1997）。岡本・山本（1985）は8つすべての心理社会的課題を測定するためErikson（1950 仁科訳 1977）に基づき、22項目から成る自我同一性SCTを作成した。分析は、内容分析および達成度合いに応じたHigh, Middle, Lowの評定により行っている。また星野（1997）は、岡本・山本の自我同一性SCTにおける老年期の心理社会的課題が、人生や死に対する態度、仕事の評価という内容に留まっていると指摘し、時間的展望や世代性も取り入れた、25項目から成るSCT-E（Sentence Completion Test for the Elderly）を作成した。分析は、岡本・山本と同様、その内容に肯定、否定、中立という3段階の評価をする。

投映法は、回答に自由度が高いため、少ない項目数で多くの情報を収集することが可能である。また、反応内容の評価において、肯定的・否定的回答の2側面のみならず、中立的回答を抽出することが出来る点で優れている。しかし、投映法を用いた研究はいずれも、肯定的回答に3点、中立的回答に2点、否定的回答に1点という得点化を行っており、得点が高いこと、すなわち肯定的内容が多いほど優れているという印象を受ける。また、SCTには解釈に主観が入りやすいという問題があるため、尺度の標準化が期待される。

事例による分析

Kaufman（1986 幾島訳 1988）は個人史や面接調査で得られたデータから、エイジレス・セルフの概念を提唱した。エイジレス・セルフとは、“高齢化とともに訪れる肉体的・社会的変化にかかわらず維持されるアイデンティティが全面に押し出される”（Kaufman, 1986 幾島訳 1988, p.7）ことである。また、Erikson自身も高齢者がどのように心理社会的課題に取り組んでいるかを検討するため、半構造化面接による調査を行っている（Erikson et al., 1986 朝長・朝長訳 1990）。近年では、高齢者との交流を通して老年期における心

理社会的課題への取り組み、特に老年期における世代性²⁾について検討されている（新木, 2005；星野, 2006）。また、伝記や小説を分析し、過去の課題が老年期に再び現れることや、他の世代の発達課題との関連が検討されてきた（Mackavey, Malley, & Stewart, 1991；山岸, 2007）。

さてViney & Tych（1985）は、質問紙調査を高齢者に適用するには限界があることを指摘し、8つの心理社会的課題のバランスを捉えるためのCASPM（Content Analysis Scales of Psychosocial Maturity：心理社会的成熟の内容分析）を作成した。CASPMでは、面接によって得られた語りを標準化された基準に従って評定し、8つの課題すべてについてパーセンタイルで示すものである。Viney & Tychは、本尺度を心理療法の進捗状況の把握や、心理査定において有効であると考察している。CASPMは肯定的要素と否定的要素のバランスを捉えられ、また、手法がユニークでありながら標準化されており非常に興味深い。しかし、詳細な手続きが公表されていないため、追試などの検討が出来ない点で問題が残る。

事例にもとづく研究では、研究者の枠づけが少ないため、老年期の多様性を捉え、新たな知見を得ることができる。また、質問紙調査では捉えられない心理社会的課題への取り組み方や、どのように課題を達成したかを捉えることが可能である。しかし、これまでの事例にもとづく研究は、調査方法や分析方法が明記されていないなど、客観性に問題が残る。近年発展している質的分析を用いて実証的に検討することが今後の課題である。

以上、老年期における心理社会的課題の測定に関して概観した。量的研究であれ質的研究であれ、肯定的要素に着目した研究が多くを占めていた。Eriksonは肯定的要素と否定的要素のバランスが人間の発達において重要であると主張しており、今後は、この2つの要素のバランスについて検討する必要がある。

心理社会的課題に関連する要因

老年期における心理社会的課題に関連する要因として、基本的属性や精神的健康の維持との関連が検討されてきた。また、近年の回想研究の隆盛により、人生を振り返る経験である回想・自分史との関連を検討した研究も散見された。

基本的属性との関連

教育歴との関連が認められないことが一貫した知見として報告されているが（柳澤他, 2002；日下, 2004；大塚・渡邊, 2005）、性別、主観的健康感、家

族形態などとの関連については一貫した知見が得られていない (Domino & Affonoso, 1990; McAdams, Aubin, & Logan, 1993; 岡本, 1998; 柳澤他, 2002; 日下, 2004)。年齢についても、有意な差は認められないとする研究と (柳澤他, 2002)、64歳以下よりも65歳以上のほうがこれまでの人生に満足しているとする研究があった (星野, 1997; 日下, 2004)。

基本的属性の影響が一致しないことについては、対象者の偏りに加えて、どの尺度を用いたかといった測定方法による要因も大きいと考えられる。

精神的健康の維持との関連

主観的幸福感や心理的適応といった精神的健康との関連が多くの研究で報告されている (Wagner, Lorian, & Shipley, 1983; 岡本, 1995; 星野, 1997; 山田, 2000; 柳澤他, 2002; Brown & Lowis, 2003; 日下, 2004)。また、特に老年期における世代性と生活満足度の関連も見出されている (McAdams et al., 1993)。

Wagner et al. (1983) は、単に“精神的健康”ではなく、睡眠の程度との関連を検討しており興味深い。この研究では、122人の高齢者に質問紙調査を行い、心理社会的課題の達成度合いが低いことと不眠に関連が認められている。しかし、Wagner et al. は、心理社会的課題を測定するために、DAS (Death Anxiety Scale: 死の不安尺度) や LSIA (Life Satisfaction Index-A: 生活満足度尺度) などを用いており、実際に心理社会的課題の達成が測定されているかについて疑問が残る。

回想・自分史との関連

国内において回想や語りの類型、自分史を取り入れたプログラムとの関連を検討した研究が散見された (山田, 2000; 沼本他, 2006; 大塚・渡邊, 2005; 野村, 2002)。

山田 (2000) は、精神的活動である自分史群と身体的活動である登山群の心理社会的発達の達成度を比較し、自分史群の達成が高かったことから、人生を振り返ることが心理的効用になると考察している。これを支持する知見として、自分史を記述するプログラムが高齢者にとって健康生活を維持し、人生の統合を支える有効な支援になりうる事が報告されている (沼本他, 2006)。

以上、関連要因に関する研究を概観した。基本的属性についてはさらに検討の必要があるが、精神的健康の維持との直接の関連が見出され、また、特に睡眠との関連も示唆されている。これらの知見より、Erikson の発達図式はさらに発展の可能性があると考えられる。今後は、個人の多様性を考慮するとともに、

心理社会的課題に直接関連するのか、あるいは間接的に影響するのかといった剰余変数の検討も必要である。

第Ⅷ段階の特徴

老年期における8つすべての心理社会的課題そのもの特徴を捉える研究は少ないが、アイデンティティに関してはまとまった知見がある。また、世代性については看護領域で数編の研究がされている。

老年期の心理社会的課題

Peck (1955) は Erikson の人生後半期の心理社会的課題は大づかみであると批判し、老年期に3つの心理的課題と危機を仮定した。具体的には、①自我の分化か仕事役割の没頭かという引退の危機、②身体を超越するか身体へ没頭するかという身体的健康の危機、③自我の超越か自我への没頭かという死の危機である。

老年期は20~30年という長い期間にわたり、また、個人差も顕著になる。Peck の指摘したように、Erikson の指摘した心理社会的課題については検討の余地がある。Peck は理論的考察によって上記の3つの危機を仮定しており、今後は実証研究によって再検討する必要がある。

老年期のアイデンティティ

アイデンティティに関する研究は鑑他 (1984) の一連の著書があるため、ここでは簡単に紹介することとする。老年期のアイデンティティについてまとまった知見が報告され始めたのは1980年代であり、その後も研究が積み重ねられてきた。主な知見として、老年期のアイデンティティが過去の体験に関連していること (Woods & White, 1981; 岡本・山本, 1985; 岡本, 1990, 1998; Zauszniewski & Martin, 1999; Torges, Stewart, & Duncan, 2008)、配偶者を亡くすことや定年退職など、老年期の重要なライフイベントに主体的に取り組むことによって、アイデンティティの統合がみられること (Thomas, DiGiulio, & Sheehan, 1988; 岡本・山本, 1985; 岡本, 1990, 1998) などが報告されている。

岡本 (1997) は、老年期にもアイデンティティ達成、モラトリアム、予定アイデンティティ、アイデンティティ拡散というアイデンティティ様態を仮定し、それぞれの様態における心理社会的課題の現れ方を検討している。その結果、ほぼすべての課題において、アイデンティティ様態との関連が認められている。岡本の研究は、Erikson のアイデアを具体的に図式化した研究であると言える。しかし、第Ⅵ段階の心理社会的課

題が示されていないこと、第Ⅶ段階に Erikson の提唱した祖父母的世代性の内容が含まれていないことについては、さらに検討する必要がある。

以上、老年期におけるアイデンティティ研究を概観した。他の心理社会的課題に関する研究に比べ、アイデンティティに関する研究は隆盛であり、まとまった知見も報告されている。本稿では、紙面の都合上、“アイデンティティ”をキーワードに検索することは出来なかったが、今後、老年期におけるアイデンティティ、およびアイデンティティと他の心理社会的課題との関連について、考察する必要がある。

老年期の世代性

新木 (2005) は、高齢者への看護実習場面において、高齢者と学生が助け-助けられる関係にあることを見出し、高齢者が学生との関係において祖父母的世代性を発現させたと考察している。さらに、このような関係により、人から介護を受けねばならない状況にありながらも、高齢者自身が自分であり続けることが保証されると指摘している。また、他世代との交流から老年期の世代性を検討した研究として、高齢者と少年の交流を書いた小説の分析がされている (山岸, 2007)。この研究では、少年と高齢者の双方がお互いを大切にしているという気持ちを持ち、相手の役に立っているという感覚から、Erikson の相互性について考察している。

Erikson によれば老年期の世代性は、“自分たちの世話をしてくれる若い世代の人々の中にある世代性の感覚を強化する” (Erikson et al., 1986 朝長・朝長訳 1990, p.79) という祖父母的世代性の感覚である。この点を踏まえると、新木の研究は、高齢者を看護する立場から、その交流が世代性の感覚を強化することに言及しており、さらに発展の可能性がある。今後、心理学の領域でも実証的に検証していく必要がある。

以上、第Ⅷ段階の心理社会的課題の特徴について概観した。Erikson によれば8つの課題は生涯にわたって発達するものである。しかし老年期の心理社会的課題に関しては、アイデンティティに関する研究以外ではほぼ未着手である。今後、8つの課題が、老年期においてどのように現れ、高齢者がそれらにどのように取り組んでいるのかを示す必要がある。

まとめと今後の課題

Erikson の発達図式は、はじめに述べたように、高齢者が体験する喪失体験を否定しないという点で今後発展されるべき重要な領域である。しかし、概観したように、その重要性は認識されつつあるものの、実証

的研究はまだその途についたばかりである。

今後の研究として、以下の諸点が重要である。

①Erikson が強調した、肯定的要素と否定的要素のバランスを捉えるような研究法が求められること、②老年期における心理社会的課題そのものの特徴を検討する必要があること。②に関しては、国外で人種や文化によって発達課題の取り進む順番や取り組み方が異なることが指摘されており (Ochse & Plug, 1986)、日本の高齢者を対象にした実証研究が求められている (野村, 2002; 園田, 2005)。

また、高齢者への心理臨床的援助と心理社会的課題についても言及したい。今回の検索では該当しなかったが、心理面接過程の理解・考察に心理社会的課題を援用した知見があると推察される。例えば林 (2000) は、高齢者への心理療法を通して、その主訴の根底に、統合の感覚やライフサイクルの連続性を見出している。今後、高齢者への心理臨床的援助において、心理社会的課題がどのように援用されているのかについて考察する必要がある。

【注】

- 1) 原語は Syntonic と Dystonic である。朝長・朝長 (1990) はこれらを「同調性」「非同調性」と訳したが、鐘 (1986) は、心理力動的観点から「プラスの心的な力」と「マイナスな心的力」と表している。これを踏まえ、本稿ではより端的に「肯定的要素」「否定的要素」と記すこととした。
- 2) Generativity は「生殖性」「世代継承性」などと訳されることもあるが、本稿では鐘 (1986) に基づき「世代性」と記すこととした。

【引用文献】

- 新木真理子 (2005). エリクソンの祖父母的世代継承性と高齢者の看護—臨床実習の場は「世代間交流の場」でもある— 総合看護, 3, 17-23.
- Birren, J. E. (1961). A brief history of the psychology of aging. *Gerontologist*, 1, 69-77.
- Brown, C., & Lewis, M. J. (2003). Psychosocial development in the elderly: An investigation into Erikson's ninth stage. *Journal of Aging Studies*, 17, 415-426.
- Darling-Fisher, C. S., & Leidy, N. K. (1988). Measuring Eriksonian development in the Adult: The modified Erikson psychosocial stage inventory. *Psychological Reports*, 62, 747-754.
- Domino, G., & Affonso, D. D. (1990). A personality

- measure of Erikson's life stages: The inventory of psychosocial balance. *Journal of Personality Assessment*, **54**, 576-588.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton.
- (エリクソン, E. H. 仁科弥生 (訳) (1977). 幼児期と社会 I みすず書房)
- Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1986). *Vital involvement in old age*. New York: W. W. Norton.
- (エリクソン, E. H., エリクソン, J. M., & キヴニック, H. Q. 朝長正徳・朝長梨枝子 (訳) (1990). 老年期一生き生きしたかわりあいー みすず書房)
- 林智一 (2000). 老人保健施設における心理療法的接近の試みー長期入所の高齢期女性との心理面接過程からー 心理臨床学研究, **18**, 58-68.
- 星野和実 (1997). 老年期の心理社会的発達に関する研究ー SCT による検討ー 三重県立看護大学紀要 **1**, 47-58.
- 星野和実 (2006). 老年後期の心理社会的発達としての老年期超越性 静岡大学人文学部紀要, **57**, 35-47.
- Kaufman, S. R. (1986). *The ageless self: Source of meaning in late life*. The University of Wisconsin Press.
- (カウフマン, S. R. 幾島幸子 (訳) (1988). エイジレス・セルフー老いの自己発見ー 筑摩書房)
- 河合千恵子・佐々木正宏 (2004). 配偶者の死への適応とサクセスフルエイジングー16年にわたる縦断研究からの検討ー 心理学研究, **75**, 49-58.
- 日下菜穂子 (2004). Erikson 理論に基づく老年期の心理社会的発達尺度 (OEPSI) の作成 同志社女子大学総合文化研究所紀要, **21**, 97-105.
- Mackavey, W. R., Malley, J., & Stewart, A. J. (1991). Remembering autobiographically consequential experiences: Content analysis of psychologists' accounts of their lives. *Psychology and Aging*, **6**, 50-59.
- McAdams, D. P., Aubin, E. de St., & Logan, R. L. (1993). Generativity among young, midlife, and older adults. *Psychology and Aging*, **8**, 221-230.
- 内閣府 (2009). 高齢社会白書 佐伯印刷
- 中村律子・宮前淳子 (2008). 高齢者の「主観的健康観」に関する研究ー半構造化面接における高齢者の語りからー 香川大学教育実践総合研究, **16**, 157-168.
- 中西信男・佐方哲彦 (2001). EPSIーエリクソン心理社会的段階目録検査ー 上里一郎 (監) 心理アセスメントハンドブック第2版 西村書店 pp.365-376.
- 野村晴夫 (2002). 高齢者の自己語りと自我同一性との関連ー語りの構造的整合・一貫性に着目してー 教育心理学研究, **50**, 355-366.
- 沼本敦子・原祥子・浅井さおり・小野光美・岩郷しのぶ・泉キヨ子 (2006). 看護支援を受けて自分史を記述することによる高齢者の心理社会的発達 金沢大学つるま保健学会誌, **30**, 125-143.
- Ochse, R., & Plug, C. (1986). Cross-cultural investigation of the validity of Erikson's theory of personality development. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 1240-1252.
- 岡本祐子 (1990). 高齢者の死の受容と自我同一性に関する研究 広島中央女子短期大学紀要, **27**, 5-12.
- 岡本祐子 (1995). 高齢期における精神的充足感形成に関する研究 (第1報)ー高齢者の精神的充足感獲得と生活の満足度および主体的欲求との関連性ー 日本家政学会誌, **46**, 923-932.
- 岡本祐子 (1997). 中年からのアイデンティティ発達の心理学 ナカニシヤ出版
- 岡本祐子 (1998). 現役引退危機から見た老年期のアイデンティティ様態と心理社会的課題達成の特徴 広島大学教育学部紀要 (第二部), **47**, 141-148.
- 岡本祐子・山本多喜司 (1985). 定年退職期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, **33**, 185-194.
- 大塚裕子・渡邊映子 (2005). 心理社会的発達の観点からみた老年期の reminiscence に関する研究 日米高齢者保健福祉学会誌, **1**, 85-95.
- Peck, R. C. (1955). Psychological development in the second half of life. In B. L. Neugarten (Ed.), (1968). *Middle age and aging: A reader in social psychology*. University of Chicago Press. pp.88-92.
- Peterson, B. E., & Klohnen, E. C. (1995). Realization of generativity in two samples of women at midlife. *Psychology and Aging*, **10**, 20-29.
- Rasmussen, J. E. (1964). The relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. *Psychological Reports*, **15**, 815-825.
- Romaniuk, J. G., & Romaniuk, M. (1981). Creativity across the lifespan: A measurement perspective. *Human Development*, **24**, 366-381.
- Rosenthal, D. A., Gurney, R. M., & Moore, S. M. (1981). From trust to intimacy: A new inventory for examining Erikson's stages of psychosocial development. *Journal of Youth and Adolescence*, **10**, 525-537.

- Schaie, K. W. (1980). Intelligence and problem solving. In J. E. Birren, & R. E. Sloane (Eds.), *Handbook of mental health and aging*. New York: Prentice-Hall. pp.262-284.
- 下仲順子・中里克治・高山緑・河合千恵子 (2000). E. エリクソンの発達課題達成尺度の検討—成人期以降の発達課題を中心として— 心理臨床学研究, 17, 525-537.
- Snarey, J., Kohlberg, L., & Noam, G. (1983). Ego development in perspective: Structural stage, functional phase, and cultural age-period models. *Developmental Review*, 3, 303-338.
- 園田雅代 (2005). 高齢者の「語り」を活用する研究 日本児童研究所 (編) 児童心理学の進歩 金子書房 pp.169-180.
- 鎌幹八郎 (1979). エリク・H・エリクソン 荻野恒一・相場均 (編) 現代精神分析病理学のエッセンス ぺりかん社 pp.351-374.
- 鎌幹八郎 (1986). エリクソンの発達論とライフサイクル 村井潤一 (編) 発達 ミネルヴァ書房 pp.160-213.
- 鎌幹八郎・宮下一博・岡本祐子 (1995). アイデンティティ研究の展望Ⅱ ナカニシヤ出版
- 鎌幹八郎・岡本祐子・宮下一博 (2002). アイデンティティ研究の展望Ⅵ ナカニシヤ出版
- 鎌幹八郎・山本力・宮下一博 (1984). アイデンティティ研究の展望Ⅰ ナカニシヤ出版
- Thomas, L. E., DiGiulio, R. C., & Sheehan, N. W. (1988). Identity loss and psychological crisis in widowhood: A re-evaluation. *International Journal of Aging & Human Development*, 26, 225-239.
- Torges, C. M., Stewart, A. J., & Duncan, L. E. (2008). Achieving ego integrity: Personality development in late midlife. *Journal of Research in Personality*, 42, 1004-1019.
- Viney, L.L., & Tych, M. (1985). Content analysis scales measuring psychosocial maturity in the elderly. *Journal of Personality Assessment*, 49, 311-317.
- Wagner, K. D., Lorian, R. P., & Shipley, T. E. (1983). Insomnia and psychosocial crisis: Two studies of Erikson's developmental theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 51, 595-603.
- Woods, N., & Witte, K. L. (1981). Life satisfaction, fear of death, and ego identity in elderly adults. *Bulletin of the Psychonomic Society*, 18, 165-168.
- 山田典子 (2000). 老年期における余暇活動の型と生活満足度・心理社会的発達の関連 発達心理学研究, 11, 34-44.
- 山岸明子 (2007). 老人と少年の交流がもたらすもの—2つの小説をめぐる発達心理学的考察— 順天堂大学医療看護学部医療看護研究, 3, 102-108.
- 柳澤理子・馬場雄司・伊藤千代子・小林文子・草川好子・河合富美子他 (2002). 家族および家族外からのソーシャル・サポートと高齢者の心理的 QOL との関連 日本公衆衛生雑誌, 49, 766-773.
- Zauszniewski, J. A., & Martin, M. H. (1999). Developmental task achievement and learned resourcefulness in healthy older adults. *Archives of Psychiatric Nursing*, 1, 41-47.